

親鸞聖人傳記上

第一段

夫 聖人の俗姓は藤原氏 天兒屋根尊 二十一世

の苗裔大織冠 鎌子の内大臣 の玄孫 近衛の大將右大臣

贈左大臣 従一位内曆公 後長岡の大臣と号し 或いは閑院の大臣と

号す 贈正一位大政大臣房前公の孫 大納言式部卿真楯の息也 六

代の後胤 弼の相公有國の卿 五代の孫 皇太后宮

の大進有範の息男なり しかれば朝廷につかへて霜

雪をもいただき 射山にわしりて榮華をもきわむべか

りし人なれども 興法の因うちにきざし 利生の縁

ほかにもよをすによりて 九歳の春のころ 伯父銀青

光祿大夫範綱の卿 干時に従四位上 前若狭守 後白河上皇の

近臣なり 聖人の養父 前大僧正 慈圓慈鎮和尚 是也 法性寺殿の

御息 月輪殿の長兄 の貴坊へ相具したてまつりて鬢髪を

剃除したまひき 範宴少納言の公と號す しかしよ

りこのかた しばしば南嶽天台の玄風を慕ふて ひろ  
く三観仏乗の理に達し ところしなへに楞嚴僧都の餘  
流をたたえて ふかく四教圓融の義にあきらかなり

## 第二段

建仁第一辛酉の曆春の此 上人二十九歳 隱遁の志に  
ひかれ 聖應の示誨に任て 吉水の禪室に尋参りた  
まひき これすなはち 世くだり人つたなふして 萬  
行諸善の小路まよひやすきによつて 本願一實の大  
道におもむかしめんとなり 真宗紹隆の大祖聖人こ  
とに宗の淵源をつくし 教の理致をきわめてこれを  
のべたまふに 立所に佗力攝生の旨趣を領受し 飽  
まで凡夫直入の眞心を獲得しましませり

第三段

建仁三年 癸亥 四月五日の夜寅の時 上人夢想の告

ましましき かの記にいわく 六角堂の救世菩薩 顔

容端嚴の聖僧の形を示現して 白衲の袈裟を着服せ

しめ 廣大の白蓮華に端座したまひて 善信に告命

してのたまわく

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂

救世菩薩 善信にのたまはく これはこれ 我誓願な

り 善信この誓願の旨を布演して 一切群生にきか

しむべしと云云 尔時善信夢の中にありながら 御堂

の正面にして東方を見れば 峩々たる岳山あり そ

の高山に數千萬億の有情群集せりと見ゆ そのとき

告命のごとく この文の意を かの山に集れる有情

に對して とききかしめおわるとおぼへて 夢さめお

わんぬと云云 つらつらこの記録をひらひて かの夢

想を案ずるに 真宗繁昌の奇瑞 念佛弘興の標示な

り されば聖人 後のときおほせられてのたまはく

佛教むかし西天よりおこりて 経論いま東土につた

はる これ偏に上宮太子の廣徳 山よりも高く海よ

りも深し 我朝欽明天皇の御宇に これをわたされ

しによて すなはち浄土の正依経論等この時に来至

す 儲君もし厚恩を施したまはずんば 凡愚いかで

か本願に値ことをえん 救世菩薩はすなはち儲君の本

地なれば 垂迹興法の願をあらはさんがために 本

地の尊容を示すところなり 抑また 大師源空聖人

もし流刑に處せられたまはずんば 我また配所におも

むかんや もしわれ配所におもむかずんば なにによ

てか邊鄙の群類を化せん これなを師教の恩致なり

大師だいし聖人しょうにんすなはち勢至せいしの化身けしん 太子たいしまた観音かんのんの垂跡すいしゃく  
なり このゆへにわれ二菩薩にぼさつの引導いんどうに順じゆんじて 如来にょらい  
の本願ほんがんをひろむるにあり 真宗しんしゆうこれによりて興こうじ  
念仏ねんぶつこれによりて煽さかんなり これしかしながら 聖しやう  
者の教誨きやうけによりて さらに愚昧ぐまいの今案こんあんをかまへず  
かの二大士にだいじの重願じゆうがん ただ一佛名いちぶつみやうを専念せんねんするにたれり  
いまの行者ぎやうじや 錯あやまて脇士きやうじにつかふることなかれ ただ  
ちに本佛ほんぶつをあふぐべしと云云うんぬん 故かに聖人しょうにん親鸞しんらん 傍かたわ  
らに皇太子こうたいしをあがめたまふ 蓋けだしこれ 佛法ぶつぽう弘通ぐづうの浩おう  
ひなる恩おんを謝しやせんがためなり

#### 第四段

元久二年げんきゆうにねん 乙丑きのとのうし 四月七日夜寅しがつなのかのよとらの時とき 釋空しゃくくう然夢相ねんむそうの告つげ  
にいはいはく 聖徳太子しやうとくとくたいし 親鸞上人しんらんしやうにんを禮らいし 奉たてまつりて云のたまはく

敬礼大慈阿彌陀佛 為妙教流通來生者

五濁惡時惡世界中 決定即得無上覺也

しかれば 祖師上人は 彌陀如來の化身にてましま  
すといふことあきらかなり

### 第五段

黒谷の先徳 源空 在世のむかし 矜哀のあまり ある

ときは恩許を蒙て製作を見寫し あるときは真筆を

降して名字を書賜す すなはち 顕浄土方便化身土

文類六 云 親鸞上人撰述 しかるに愚禿釈鸞 建仁

辛酉 曆 雑行を棄て 今本願に皈し 元久 乙丑

歳 恩恕を蒙て 今選擇を書く 同年初夏中旬第四

日 選擇本願念佛集の内題の字 并に南無阿彌陀佛

往生之業 念佛為本と 釈綽空與 空の真筆を以て

之を書か令たまひき 同じき日 空之真影申し預り

圖画し奉る 同じき二年閏七月下旬第九日 真影の

銘は真筆を以て 南無阿彌陀佛と 若我成佛 十方

衆生 称我名號 下至十聲 若不生者 不取正覺

彼佛今現在成佛 當知本誓重願不虛 衆生称念必得

往生之真文與を書か令たまふ 又夢の告に依て 綽

空の字を改め 同じき日 御筆を以て名之字を書か

令たまひ畢 本師聖人今年七旬三の御歳也 選擇

本願念佛集者 禅定博陸 月輪殿兼實法名円照 之教命

に依て選集令たまふ所なり 真宗之簡要 念佛之奥

義 斯れに攝在せり 見る者諭易く 誠に是希有最

勝之華文 無上甚深之寶典也 年を渉り日を渉りて

其の教誨を蒙る之人 千萬なりと雖 親と云ひ疎と

云ひ 此見写を獲る之徒 甚だ以て難し 尔るに既

に製作せいさくを書寫しよしゃし 真影しんねいを圖画ずがす 是專念正業之徳也これせんねんしやうごうのとくなり  
是決定往生之徴也これけつじやうおうじやうのしるしなり 仍よりて悲喜ひき之淚のなみだを抑おさえて 由来ゆらい之縁のえん  
を註しるすと云云うんぬん

## 第六段

おほよそ源空聖人在生のいにしえ 他力往生の旨むねを  
ひろめたまひしに 世よあまねくこれにこそぞり 人ひとこと  
ごとくこれに皈きしき 紫禁青宮の政まつりごとを重おもくする砌みぎり  
にも まづ黄金樹林の萼はなぶさにこころをかけ 三槐九棘さんかいきゆうきよく  
の道みちを正ただしくする家いえにも 直ただちに四十八願しじゅうはちがんの月つきをもてあ  
そぶ しかのみならず戎狄じゆてきの輩ともがら 黎民れいみんの類たぐい これを  
あふぎ これを貴たつとびずといふことなし 貴賤きせん轅ながえをめ  
ぐらし 門前市もんぜんいちをなす 常随じやうずい昵近じっこんの緇徒しとそのかずあ  
り 都すべて三百八十餘人さんびやくはちじゅうよにんと云云うんぬん しかりといへども

親まのあたりその化けをうけ 懇ねんごろにその誨おしえをまもるやから

はなはだまれなり わづかに五六輩ごりくはいだにもたらず 善ぜん

信聖人しんしょうにん あるとき申もうしたまはく 予よ 難行道なんぎやうどうを閣おしおぎて

易行道いぎやうどうにうつり 聖道門しょうどうもんをのがれて浄土門じょうどもんにいりし

より以来このかた 芳命ほうめいをかふむるにあらずよりは あしゅつに出

離解脱りげだつの良因りやういんを蓄たくわえんや 喜よろこびの中の悦よろこび なにごとか

これにしかん しかるに同室どうしつの好よしみを結むすびて ともに一いっ

師しの誨おしえをあふぐ輩ともがら これおおしといへども 眞實しんじつに

報土得生ほうどとくしやうの信心しんじんを成じやうじたらんこと 自佗じたおなじくし

りがたし 故かるがゆえに 且かつは當来とうらいの親友しんぬたるほどをもしり

且かつは浮生ふしやうの思出おもいでともしはんべらんがために 御弟子おんでし

参集さんじゅうの砌みぎりにして 出言しゅつごんつかふまつりて 面々めんめんの意趣いしゅ

をも試こころみんとおもふ所望しょもうありと云云うんぬん 大師聖人だいししょうにんのたま

はく この條じやうもともしかるべし すなはち明日みょうにちひと

びと来集らいじゅうのとき おおせられいだすべしと しかる

に翌日集會よくじつしゅうえのところに 上人しょうにん 親鸞しんらん のたまはく 今こん

日は信不退しんふたいぎょうふたいの御座みざを両方りょうほうにわかたるべきなり

いづれの座ざにつきたまふべしとも おのおのしめした

まへと そのとき三百餘人さんびやくよにんの門侶もんりよみなそのころを

えざる氣きあり 干時置き字ときに法印大和尚位ほういんだいかしょういせいかく聖覚せいかく 并ならびに釋しゃくの

信空上人しんくうしょうにんほうれん法蓮ほうれん 信不退しんふたいの御座みざに着つく可べしと云云うんぬん 次に

沙彌しゃみ法力ほうりき 熊谷直實くまがいなおぎねにゆうどう入道にゅうどう 遅参ちさんして申もうしていはく 善信ぜんしんの

御房おんぼうの御執筆ごしゅひつなにごとぞやと 善信上人ぜんしんしょうにんのたまはく

信不退しんふたいぎょうふたいの座ざをわけらるるなりと 法力房ほうりきぼうもうし申もうして

いはく しからば法力ほうりきもるべからず 信不退しんふたいの座ざにま

いるべしと云云うんぬん 仍よりてこれをかきのせたまふ ここに

數百人すひやくにんの門侶群居もんりよぐんきよすといへども さらに一言いちごんをのぶ

人ひとなし これ恐おそらくは自力じりきの迷心めいしんに拘かかわつて 金剛こんごうの真しん

信しんに昏くらがいたすところ歟か 人ひとみな無音ぶいんのあひだ 執しゆ  
筆上人ひつしようにん 親鸞しんらん 自名じみょうをのせたまふ やや暫しばらくありて 大だい  
師聖人ししようにんおほせられてのたまはく 源空げんくうも信不退しんふたいの座ざ  
につらなり侍はんべるべしと そのとき門葉もんよう あるひは屈くつ  
敬けいの氣きをあらはし あるひは鬱悔うっけのいろをふくめり

## 第七段

上人しようにん 親鸞しんらん のたまはく いにしへわが大師聖人だいししようにん 源空げんくう  
の御おんまへに 聖信房しようしんぼう 勢觀房せいかんぼう 念佛房ねんぶつぼう以下いげの人々ひとびとお  
ほかりしとき はかりなき諍論じやうろんをしはんべることありき  
そのゆへは 聖人しようにんの御信心ごしんじんと善信ぜんしんが信心しんじんと  
いささかもかはるところあるべからず ただ一ひとつなり  
と申もうしたりしに このひとびととがめていはく 善信ぜんしん  
房ぼうの 聖人しようにんの御信心ごしんじんとわが信心しんじんとひとしと まふさ

るることいはれなし いかでかひとしかるべきと 善ぜん

信申しんもうしていはく などがひとしと申もうさざるべきや そ

のゆへは深智博覧じんちばくらんにひとしからんとも申もうさばこそ ま

ことにおほけなくもあらめ 往生おうじょうの信心しんじんにいたりて

は ひとたび佗力たうりき信心しんじんのことはりをうけたまはりしよ

りこのかた 全くまったわたくしなし しかれば 聖人しょうにんの

御信心ごしんじんも佗力たうりきよりたまはらせたまふ 善信ぜんしんが信心しんじんも佗た

力りきなり かるがゆへにひとしくしてかはるところなし

と申もうすなりと申もうしはんべりしところに 大師聖人だいししょうにんまさ

しくおほせられてのたまはく 信心しんじんのかはるとまふす

は 自力じりきの信しんにとりてのとなり すなはち智慧ちえ各別かくべつ

なるゆへに信しんまた各別かくべつなり 佗力たうりきの信心しんじんは 善悪ぜんまくの凡ぼん

夫ぶ ともに佛ぶつのかたよりたまはる信心しんじんなれば 源空げんくうが

信心しんじんも善信房ぜんしんぼうの信心しんじんも さらにかはるべからず ただ

ひとつなり わがかしこくて信ずるにあらず 信心の  
かはりあふておはしまさんひとびとは わがまいらん  
浄土へはよもまいりたまはじ よくよくこころえら  
るべき事なりと云云 ここに面々舌をまき 口を閉て  
やみけり

## 第八段

御弟子入西房 上人 親鸞 の真影をうつしたてまつ

らんとおもふこころざしありて 日ごろをふるところ

に 上人そのこころざしあることをかながみておほ

せられてのたまはく 定禅法橋にうつさしむべしと

入西房 監察のむねを随喜して すなはちかの法橋

を召請す 定禅左右なくまいりぬ すなはち尊顔に

むかひたてまつりて申ていはく 去夜 奇特の霊夢

をなん感ずるところなり そのゆめのうちに拝し奉

るところの聖僧の面像　いま向ひたてまつる尊容に  
すこしもたがふところなし　といひて　忽たちまちに随喜感ずいきかん  
歎たんのいろふかくして　みづからその夢ゆめをかたる　貴僧きそう  
二人来入ににんらいじゅうす　一人の僧そうのいはく　この化僧けそうの真影しんねいを  
うつさしめんとおもふ志こころざししあり　ねがはくは禅下筆ぜんかふで  
をくださすべしと　定禅問じょうぜんといていはく　かの化僧けそうたれば  
とぞや　件くだんの僧そうのいはく　善光寺ぜんこうじの本願ほんがんの御房おんぼうこれ  
なりと　ここに定禅掌じょうぜんたなごころを合せ跪ひざますきて　夢ゆめのうちに  
おもふやう　さては生身しょうじんの彌陀如来みだによらいにこそと　身みの  
毛けいよだちて恭敬尊重くぎようそんじゅうをいたす　また　御頭みくしばかり  
をうつされんに足ぬべしと云云うんぬん　かくのごとく問答往もんどうおう  
復ふくして夢ゆめさめをはりぬ　しかるにいまこの貴坊きぼうにまい  
りて見奉みたまつる尊容そんよう　ゆめのうちの聖僧しょうそうにすこしもたが  
はずとて　随喜ずいきのあまりなみだをながす　しかあれば

夢ゆめにまかすべしとて　いまも御頭みくしばかりをうつし奉たてまつ

りけり　夢む想そうは仁治三年九月二十日の夜よなり　つらつ

らこの奇き瑞ずいをおもふに　聖人しようにん弥陀みだ如来にょらいの来現らいげんといふ

こと炳へい焉えんなり　しかれば　弘通ぐづうしたまふ教ぎょう行ぎょう　おそ

らくは彌陀みだの直説じきせつといひつべし　あきらかに無漏むろの慧え

燈とうをかかげて　とをく濁世じよくせの迷闇めいあんをはらひ　あまね

く甘露かんろの法雨ほううをそそぎて　はるかに枯竭こかつの凡惑ぼんなくをうる

ほさんがためなりと　おほぐべし　信しんずべしと云うんぬん